



Title	自動詞の例外的振る舞いに関する一考察
Author(s)	大井, 良友
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2020, 2019, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76975
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

自動詞の例外的振る舞いに関する一考察 *

大井 良友

1. はじめに

一般的に動詞は名詞句を後続することができるか (= 目的語をとれるか) 否かによって他動詞と自動詞に分類される。しかし、ふつう自動詞とみなされる語が直後に名詞句を従える構文が存在することも知られており、英語の同族目的語構文 (Cognate Object Construction) はそのひとつである。この構文は自動詞にそれと同じ形態の名詞を主要部とする名詞句が形容詞などの修飾要素とともに後続する表現である。

- (1) a. Miss Marple smiled a deprecating smile. (大室 2018: 17)
- b. Mary laughed a sad laugh at the meeting. (高見・久野 2002: 133)

同族目的語構文に生起する動詞について、Jones (1988) や Massam (1990) は動詞と形態的に異なる名詞を後続できないものに限定している。彼らの主張に従えば、(2) の不適格性から (1) は生粋の自動詞が関わっている同族目的語構文の事例だが、多様な名詞を目的語にとる動詞 *dance* や *dream* が同族目的語を従えている表現は同族目的語構文とは異なる構文 (他動詞構文) の事例であると分析されることになる。

- (2) a. *? He smiled a silly grin. (Massam 1990: 165)
- b. * Mary laughed a sad smile at the meeting. (高見・久野 2002: 144)
- (3) a. Sam danced {a jig / a piece from Swan Lake / something involving lots of pirouettes}.
- b. Bill dreamed {a most peculiar thing / that he was a crocodile}. (Jones 1988: 89)

しかし、Horita (1996) によるインフォーマント調査や大室 (2018) などによるコーパス調査によって、*smile* などの「典型的な」自動詞であっても異なる形態の名詞が後続可能である用例が指摘された。¹

- (4) a. He slept a fitful slumber. (Horita 1996: 225)
- b. “Let’s wipe our brows and smile a graduation grin,” said Ms. Ator of Reisterstown.
(Macfarland 1995: 90, T. W. Waldron, *The Baltimore Sun*)
- c. Van Aldin laughed a quiet little cackle of amusement.
(大室 2018: 24, A. Christie, *The Mystery of the Blue Train*)

* 本稿は 2019 年 10 月 19 日に開かれた英語語法文法学会第 27 回大会 (於、北九州市立大学) での拙発表『「上位語型」同族目的語構文の動機づけ—名詞 *laugh* が生起するパターンを中心に—』の内容を加筆修正したものである。

¹ 例文中の下線・斜字体は全て筆者によるものである。

- (5) a. Instead she cackled a wet laugh into the phone.
 (The Corpus of Contemporary American English, 以下 COCA と呼ぶ)
- b. Nancy grinned a mischievous smile of recognition ...
 (Macfarland 1995: 90, S. Warner, *The Wide Wide World*)
- c. Goose slurped a deep drink of milk from his straw.
 (金澤 2013: 128, R. Villareal, *My Father, the Angel of Death*)

(4) における目的語の名詞は動詞と同形態の名詞の下位語である一方、(5) における目的語の名詞は動詞と同形態の名詞の上位語である。本稿では両者をそれぞれ「下位語型」・「上位語型」と呼ぶ。典型的な同族目的語構文以上の冗長さゆえに容認できないと判断するインフォーマントも多いが、実例が複数見つかる以上、なぜ冗長であるにも関わらず下位語型・上位語型が使用されうるのかを明らかにすることには意義があるといえる。これらの表現は同族目的語構文の研究の中で言及されることはあったものの、概ね同族目的語構文の周辺事例として提示されるのみで、この表現に特化した議論はほとんどなされてこなかった。

本稿は下位語型・上位語型に焦点を絞り、考察を行う。2章で同族目的語構文に関する議論の中で両パターンに言及している先行研究の議論を概観し、3章では COCA や Google Books を用いて得られた、先行研究では指摘されていなかった実例の存在を提示する。それらのデータの存在を踏まえ、4章にて下位語型と上位語型がそれぞれ同族目的語構文とは異なる構文の特性を継承した構文であると主張する。

2. 先行研究

同族目的語構文については今日までに様々な理論的枠組みから多くの研究がなされてきたが、自動詞が異なる形態の名詞を従えている表現に言及しているのは管見の限り Macfarland (1995)、Horita (1996)、高見・久野 (2002)、堀田 (2005)、金澤 (2013)、大室 (2018 など) である。本章では、金澤 (2013) と高見・久野 (2002) の分析を取り上げる。

まず、金澤 (2013) による分析を概観する。金澤は名詞 *drink* が軽動詞構文や同族目的語構文に生起するパターンについて、名詞を修飾する形容詞の意味に注目し、構文間の意味的特徴の違いを考察しており、その議論の中で「詳述化された同族目的語構文」として動詞と名詞が形態的に異なるタイプの表現を取り上げている。本稿に関わる議論のみをまとめると、金澤は典型的な同族目的語構文と「詳述化された同族目的語構文」を区別し、さらに後者の中でも、目的語の名詞が *drink* と「意味的に同族」であるタイプ (= 下位語型) と、名詞ではなく動詞が *drink* と「意味的に同族」であるタイプ (= 上位語型) を区別し、(6a) から (6c) にかけて構文全体の詳述性が高くなり、意味の拡張が進んでいると分析している。

- (6) a. Cheskis drank a quick drink ... (金澤 2013: 124, I. G. Goldman, *The Barfighter*)
- b. Claire laughed and drank a dainty sip of coffee.

(金澤 2013: 127, S. Stevens, *Foreign Affair*)

- c. Goose slurped a deep drink of milk from his straw. (= (5c))

「詳述化された同族目的語構文」は名詞 *sip* や動詞 *slurp* のように *drink* の表す行為の様態を詳述する語が生起することで文全体の詳述性が上がっている。また、生起する形容詞についてはいずれのタイプにおいても動作の速さや様態、あるいは参与者の状態を表すことで「飲む」という動作を詳述する役割を果たすと指摘している。

次に高見・久野 (2002) の分析を概観する。高見・久野は、動詞に後続する名詞が形態的に同じか異なるかに関わらず、その適格性は (7) に示す機能的制約によって説明できると主張している。

- (7) 同族目的語構文に課される機能的制約: 同族目的語構文においては、同族目的語 (名詞句全体) が示唆する動作の様態が、動詞が表わす動作の様態のサブセットでなければならない。 (高見・久野 2002: 147)

この機能的制約によって (1) のような典型的な同族目的語構文の目的語に何らかの修飾要素が伴わなければならないという特性を説明することができる。すなわち、動詞と同じ意味を表す目的語の名詞単体では制約に違反するため、適格文にするには修飾要素の存在が必須となる。高見・久野は目的語の名詞が動詞と形態的に異なる場合であっても同様の説明が当てはまると主張する。高見・久野は (4b) や (5b) が適格である一方で、(8) の作例がインフォーマントにより不適格と判断されたことを踏まえ、(8) が容認されないのは *smile* と *grin* のように両者の表す意味が類似している場合であっても、名詞単体ではサブセット機能を果たせないからであると説明している。

- (8) a. * Whenever he smiles, he smiles a grin.
b. * He grinned a smile at the meeting. (高見・久野 2002: 147)

さらに高見・久野は修飾要素を伴っているにもかかわらず不適格とされる (2) についてもこの機能的制約に基づく説明を行っている。(2b) について、名詞 *smile* は「声に出さない笑い (微笑み)」を表す一方、動詞 *laugh* は「声に出す笑い」を表しており、前者の表す動作の様態が後者の表すそのサブセットとなっていないため不適格であると説明している。また、適格とされている (4b) と動詞と名詞の組み合わせ自体が同じであるにもかかわらず (2a) が容認されないのは、*smile* が表す「好意を表す微笑」という意味と名詞句 *a silly grin* の表す「愚かな笑い」がサブセット関係にあるとはいえないからだと説明している。

本章では、同族目的語構文に関する議論の中で動詞と名詞の形態が異なるパターンについて言及している金澤 (2013) と高見・久野 (2002) を概観した。両者は当該パターンと同

族目的語構文の関連性に関する主張に違いがみられるものの (金澤は動詞と名詞の形態が異なるパターンは形態が同じパターンより詳述性が高く意味拡張が進んだものである、高見・久野は動詞に後続する名詞の形態に関わらず共通の機能的制約によってその適格性を説明できる、と主張している)、目的語の名詞に形容詞などの修飾要素が必須で、生起可能な形容詞には何らかの制限があることを主張している点では共通している。

3. さらなるデータの観察

本章では、先行研究が扱っていたよりも多様な表現が下位語型・上位語型には存在することを提示する。3.1 節では下位語型・上位語型ともに先行研究の指摘よりも多様な修飾表現が目的語の名詞と共起することを示す。3.2 節では目的語の名詞に修飾要素が伴わない用例が存在することを示す。

3.1. 修飾要素の多様性

金澤 (2013) は「詳述化された同族目的語構文」の場合、生起する形容詞は動詞の表す動作の様態を詳述するものであると主張していた。しかし、*drink* 以外の動詞に関わるパターンをコーパス等で調査すると、金澤が主張するよりも多様な形容詞が生起することが明らかになった。ここでは、同族目的語構文に生起する動詞の典型例として知られている *smile*, *laugh* 及びこれらの下位語にあたる動詞 (*grin*, *cackle* など) が関わる用例を取り上げる。

(9) の斜字体で示した形容詞を見ると、金澤の指摘通り、各形容詞は行為の様態ないし行為時の動作主の状態を表すことで、動作の様態を詳述している。

- (9) a. He quietly burped a bit of McMuffin. And he smiled a *beatific* grin
- b. He laughs his *pleasant* chuckle.
- c. She sees Juliet, [...] grinning a *sweet* smile Tess has never seen on Juliet's smug face.
- d. She giggles a *nervous* laugh, Ha ha ha. (すべて COCA)

しかし、(10) に生起している形容詞は動作の様態を表しているといえるだろうか。*toothy* や *missing-tooth* は生じた笑顔自体の視覚的特徴を、*high-decibel* や *high-pitched* は笑い声の音声的特徴を詳述している。すなわち、これらの形容詞は動作の様態というよりもむしろ当該動作によって生じた結果物 (ここでは、笑顔や笑い声) の特徴を詳述している。²

- (10) a. Lisa smiled a *toothy* grin. (COCA)

² *drink* が生起するパターンであってもモノの特徴を表す形容詞が生起する用例は見られるが、この場合名詞句の表すモノは動詞の表す行為の結果生じたモノではなく既存の「飲み物」を表している点で (10) の例とは区別すべきである。

(i) In Humboldt County, California, ... I sat with friends in a loft in the town of Eureka and *sipped a delicious drink*. (<https://merryjane.com/culture/cocktails-to-mocktails-how-cannabis-beverages-changed-my-relationship-with-alcohol>)

- b. ... Lottie simply laughed her signature *high-decibel* chuckle, then waved away any insinuation like a pesky gnat. (COCA)
- c. She grinned her *missing-tooth* smile. (COCA)
- d. Caroline giggled a *high-pitched* laugh, and Julia wondered if Caroline always laughed like that. (L. Carter, *Julia's Dilemma: Romance Love Comedy*)

高見・久野 (2002) は (2a)((11a) として再掲) を Massam(1990) と同じく不適格と判断した上で、同じ動詞と名詞の組み合わせである (4b) ((11b) として再掲) との適格性の違いを機能的制約に則って説明していた。

- (11) a. *? He smiled a silly grin.
- b. “Let’s wipe our brows and smile a graduation grin,” said Ms. Ator of Reisterstown.

しかし、大室 (2018) の指摘通り、ウェブで “smiled a silly grin” という連鎖を検索すると複数の実例が見つかった。

- (12) a. “Hello lady!” a little girl said and smiled a silly grin. (大室 2018: 30, Web)
- b. Frank smiled a silly grin. (J. Kahn, *The Killer Within*)

また、高見・久野の説明に従えば、動詞 *smile* が関わる場合は典型的な同族目的語構文であっても、*silly* のような「好意を表す微笑」と対応しない形容詞は生起できないこととなるが、ネガティブな意味を表す形容詞が生起する例は容易に見つかる。

- (13) a. Gracie smiled an *unfriendly* smile at her, clearing her throat ... (COCA)
- b. He smiled a *silly* smile while she described her research and trips to several bookstores. (N. Jorgenson, *Waiting for White Horses*)

(12-13) のような実例の存在は、機能的制約を満たすか否かの判断基準に対しても疑問を投げかけるものである。

3.2. 修飾要素を伴わない用例

ここまでは目的語の名詞句には修飾要素が必須であることを前提に議論を進めてきた。実際高見・久野 (2002) は作例を用いて目的語の名詞に修飾要素のない下位語型・上位語型は不適格であると主張していた ((8) を参照)。しかし、コーパスなどの調査から少数ではあるものの名詞句に修飾要素を伴わない実例が見つかった。(14) は下位語型の例である。

- (14) a. ... the prostitute came for the last time, thinking only of her children, the products of her work, and she smiled a grin.³
 b. They calm the sparks and smoke and all we hear is Matte laughing a cackle. (COCA)

上位語型でも同様に、目的語の名詞句に修飾要素のない用例が複数見つかった。

- (15) a. While old Bill grinned a smile and looked peaceful, like a saint in a Roman church.⁴
 b. ODE looked at Marcus smirked a smile and said, “oh well duty calls.”
 (A. Dominguez, *The Algebra of Claircty – All the Downtown Ladies*)
 c. I sighed a breath and closed my eyes, letting the secret lift from me like a burden.
 (S. St. James, *The Other Side of Midnight*)

とりわけ名詞 *laugh* は比較的多くの動詞とともに上位語型に生起する。(16) に挙げた動詞に加え、*titter*, *giggle*, *snicker* が関わる用例が確認されている。

- (16) a. From the end of the table, Marshall cackles a laugh. (COCA)
 b. “Not interested?” Nicco chuckled a laugh. “Can’t say I’ve ever heard that one before.”
 (P. Yaye, *Seduced by the Ceo*)
 c. Bevyn turned his head to look at her, and when she met his gaze and smiled at him, he guffawed a laugh. (S. Woodbury, *Crossroads in Time*)

これらの事例の存在は高見・久野 (2002) の提案する機能的制約では説明することができない。下位語型や上位語型の適格性を典型的な同族目的語構文と同様の機能的制約で説明するというアプローチには修正が必要となる。

4. 考察

下位語型・上位語型は本来目的語をとらないはずの自動詞が例外的に名詞句を後続しているという点では同族目的語構文と共通しているが、当該名詞句に修飾要素を伴わない用例が複数観察されるなど同族目的語構文とは異なる特徴を有している。本章ではなぜ下位語型・上位語型という例外的なパターンが用いられうるのかについて考察を行う。金澤 (2013) も高見・久野 (2002) も同族目的語構文と関連付けて議論していたが、本稿は各パターンがそれぞれ異なる構文からその特性を継承した構文であると主張する。

³ <https://www.amazon.in/Narayan-Anshulika-Bansal-Barkha-Chauhan-Indrajeet-Vikrant-Miranda-Verma-Rakshita/dp/9384180084>

⁴ <https://search.proquest.com/openview/8d2dd425501f4013/1?pq-origsite=gscholar&cbl=3060>

4.1. 下位語型

本稿では *laugh* や *smile* といった典型的な自動詞が生起する例を中心に議論を展開してきた。これらの動詞が生起する下位語型は例外的に見えるが、関わる動詞が 1 章で取り上げた *dance* のように同族目的語をとるものの他動詞として分析されてきた語であれば、むしろ典型的な他動詞構文の事例とみなされる。

- (17) a. John danced a {jig / tango / salsa / waltz}.
b. Sarah sang {a ballad / an aria / a hymn / the anthem}. (Levin 1993: 95)

(17) の目的語名詞句は *what sort of* 疑問文を用いて尋ねることが可能である。

- (18) a. What sort of dance did John dance?
b. What sort of song did Sarah sing?

動詞 *laugh* や *smile* はふつう受身文に生起できず、後続する名詞句を *it* で指せないという事実を踏まえると (Horita 1996、高見・久野 2002 などを参照)、これらの動詞を用いて (18) のような疑問文を作ることにはできないと予測される。しかし、筆者が行ったインフォーマント調査では、(18) に比べると容認性は下がるものの、動詞が *laugh, smile* であっても下位語型の文が答えとなる *what sort of* 疑問文が容認可能と判断された。

- (19) a. What sort of laugh did John laugh? – He laughed a mirthless chuckle.
b. What sort of smile did Sarah smile? – She smiled a lopsided grin.

これに加えて (14) のように目的語名詞句に修飾要素が伴わない事例も存在することから、本稿では下位語型は典型的な他動詞構文の特性を継承した構文であると主張する。

4.2. 上位語型

下位語型とは違い、同族目的語をとる他動詞 (*sing, dance* など) 及びその名詞形が生起する上位語型はコーパスなどを用いても用例が見つからず、作例も容認されない。また上位語型は *what sort of* 疑問文を作ることにもできないため、下位語型とは異なる動機づけを探る必要がある。本稿では名詞 *laugh* が動詞に後続する例を中心に扱い、上位語型が軽動詞構文の特徴を部分的に継承していると主張する。

名詞 *laugh* は *have, give* といった軽動詞に後続することができる。

- (20) a. We all *had* a good laugh about it.
b. Valencia *gave* a charming laugh. (ともに COCA)

これらの軽動詞構文は概略動作主が名詞句の示す行為を行ったことを表す構文である。⁵ (20) では名詞句に形容詞が生起しているが、軽動詞構文は典型的な同族目的語構文とは違い、修飾要素が生起する必要はなく、単に「笑う」という事象を表している。

- (21) a. At the very least you'll *have* a laugh.
 b. Mike *gave* a laugh to try to make it a joke. (ともに COCA)

(16) のような名詞句に修飾要素を伴わない上位語型の実例の存在は、このパターンが同族目的語構文ではなく軽動詞構文の特性を継承しているからだと考えるのが妥当である。

ただし、軽動詞構文と上位語型では生起する動詞の役割が大きく異なる。軽動詞構文に生起する動詞の表す意味はその名の通り「軽く」、描写される事象が何なのかは専ら後続する名詞の意味に依存している一方、上位語型に生起する動詞は後続する名詞の意味よりもむしろ「重く」、上位語型の文全体が表す事象は動詞によって含意されている。それにもかかわらず、上位語型の形式を用いる理由を明らかにする必要がある。

本稿では軽動詞構文と上位語型の橋渡し役を担う表現として (22) に注目したい。

- (22) a. Buck *barked* a laugh. (COCA)
 b. Pinkerton *coughs* a laugh. (COCA)
 c. But the captain merely showed green teeth and *roared* a laugh. (V. Grove, *Rhiannon*)
 d. He *rumbled* a laugh and played in her hair. (L. Trentham, *Set the Night on Fire*)

斜字体で示した動詞はみな何らかの音声が生じる行為を表す発話様態動詞ないし音放出動詞であるが、ここでは笑い声の様態を比喩的に詳述する機能を果たしている。例えば (22a) であれば「吠えるように大きい声で笑う」、(22b) は「咳込むように笑う」という行為を表す。(22) の文全体が表す主たる行為が各動詞ではなく名詞 *laugh* が表す「笑う」という行為であることは (23) の対比からも明らかである。(23) は動詞の表す字義的行為はキャンセル可能である一方、名詞の表す「笑う」という行為はキャンセルできないことを示している。

- (23) a. John *barked* a laugh, but did not actually {bark / * laugh}.
 b. John *coughed* a laugh, but did not actually {cough / * laugh}.

このように構文全体の意味的主要部が動詞ではなく目的語の名詞にある点は軽動詞構文と共通していることから、(22) の表現は軽動詞構文の変種とみなすことができる。

さらに、(22) の動詞が笑い声の様態を詳述していることは現在分詞の形で名詞 *laugh* を直接修飾することが可能であることから裏付けられる。

⁵ 軽動詞構文と同族目的語構文の違いに関する詳細は Höche (2009) などを参照。

- (24) a. She gave a harsh, *barking* laugh.
 b. With her deep, *rumbling* laugh, she added ... (ともに COCA)

興味深いことに、上位語型に生起する動詞も同様の修飾関係を表すことができる。

- (25) a. She gave a *cackling* laugh and handed him cheese and crackers. (COCA)
 b. With a *tittering* laugh, she looked around the table and ... (S. Stark, *Rebelonging*)

上位語型における本動詞はそれ自体が「笑う」という行為を含意している点で他の発話様態動詞や音放出動詞とは異なるが、笑う行為そのものではなくその音声的特徴を詳述するという機能を担う点では共通している。上位語型がその冗長さにも関わらず使用されうるのは文全体の表す行為の特徴を動詞が詳述するという構文固有の機能を果たしているからだ」と結論付けられる。

ここまでに見てきた共通性を踏まえ、上位語型は (20-21) のような典型的な軽動詞構文の特徴を継承した (22) のような変種によって動機づけられた構文であると主張する。

5. 結びにかえて

本稿では、*laugh* や *smile* のように本来動詞と同形態の名詞しか後続できないと考えられていた自動詞が異なる形態の名詞を後続している表現に焦点を絞り、考察を行った。動詞に後続する名詞のタイプによって下位語型と上位語型に区別し、コーパスなどから収集したそれぞれのパターンの実例を観察し、先行研究の説明ではこれらの表現の特性を十分に扱うことができないことを指摘した上で、下位語型は典型的な他動詞構文、上位語型は軽動詞構文及びその変種によって動機づけられていると主張した。同族目的語構文との関連性のみに注目しては捉えられなかった構文間の関係性を示した点が本稿の意義である。

下位語型・上位語型はともに用例数がきわめて少なく、生起可能な動詞／名詞も限定されているため、本稿の分析がどの程度応用可能であるかは、実例の収集だけでなく作例を用いたインフォーマント調査によっても検証する必要があると思われる。また、上位語型の分析に関しては名詞 *laugh* が生起するパターンに絞って考察したが、本稿の主張の妥当性を示すには *laugh* ほど多様な動詞と共起するパターンを調査しなければならないが、この点についても今後の課題としたい。

さらに、本稿では省略したもの、金澤 (2013) は *drink* が生起するパターンに関連して、以下のタイプも提示していた。

- (26) a. And she *swigged* a hurried *gulp* of Scotch. (金澤 2013: 129, J. Joth, *Jyros*)
 b. I didn't say anything as she *sipped* a loud *slurp* of coffee ...
 (金澤 2013: 129, J. Everson, *Vigilantes of Love*)

(26) に生起している動詞と目的語の名詞はともに *drink* の下位語にあたる語である。*smile* や *laugh* などが関わる場合には見られなかったが、*sleep* の下位語にあたる *snooze* と *nap* がそれぞれ動詞と目的語の名詞に生起している事例は見つかった。

- (27) a. Bobcat and I *snoozed a nap*, then once everyone was ready ...⁶
b. My girl *snoozed a three-hour nap*, after which we headed downtown ...⁷

これらの表現が本稿で扱った下位語型・上位語型とどのように関係しているのかについても今後の研究課題とする。

参考文献

- Davies, Mark (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA): One billion words, 1990-2019*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.
- Horita, Yuko (1996) English cognate object constructions and their transitivity. *English Linguistics* 13: 221-247.
- 堀田優子 (2005) 「同族目的語構文のカテゴリーに関する一考察」『金沢大学文学部論集 言語・文学篇』25: 67-88.
- Höche, Silke (2009) *Cognate object constructions in English: A cognitive-linguistic account*. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Jones, Michael A. (1988) Cognate objects and the case filter. *Journal of Linguistics* 24: 89-110.
- 金澤俊吾 (2013) 「英語における軽動詞構文、同族目的語構文にみられる修飾関係について —have a/an Adj drink, drink a/an Adj drink を中心に—」『英語語法文法研究』20: 118-134.
- Levin, Beth (1993) *English verb classes and alternations: A preliminary investigation*. Chicago: University of Chicago Press.
- Macfarland, Talke (1995) *Cognate objects and the argument/adjunct distinction in English*. Doctoral dissertation, Northwestern University.
- Massam, Diane (1990) Cognate objects as thematic objects. *Canadian Journal of Linguistics* 35: 161-190.
- 大室剛志 (2018) 『ことばの基礎 2 動詞と構文』東京: 研究社.
- 高見健一・久野暉 (2002) 『日英語の自動詞構文: 生成文法分析の批判と機能的解析』東京: 研究社.

⁶ <http://freedirtmonger.blogspot.com/2014/04/lowest-to-highest-badwater-to-mt-whitney.html>

⁷ tarasabo.blogspot.com/2012/08/its-beautiful-day.html